



Data

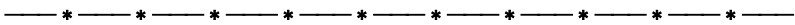
監督: 豊島圭介
 出演: 三島由紀夫/芥正彦/木村修
 /橋爪大三郎/篠原裕/宮澤章友/原昭弘/清水寛/小川邦雄/平野啓一郎/内田樹/小熊英二/瀬戸内寂聴/椎根和

👁️👁️ みどころ

1969年1月の安田講堂事件で壊滅的な打撃を受けた東大全共闘は、「次の一手」として、三島由紀夫との公開討論会を企画。思想も立場も正反対の“右翼ゴリラ三島”はこれをどのように受けて立つの？

TBSに保管されていた4時間余の素材を、1971年生まれで東大卒の豊島圭介監督がドキュメンタリー映画として完成させたが、本作に平野啓一郎、内田樹、小熊英二を登場させたのは如何なもの？なぜ、100年前の膨大な映像だけの編集で完成させた『彼らは生きていた』(18年)のような本物のドキュメンタリー映画にできなかったの？

当時の学生運動は、「論争し論破する」ことが基本中の基本。そのため、私はアジ演説とビラ書きが日常だったが、既に人気作家というだけではなく「楯の会」を含めて自分の立場を確立させていた三島には、この討論会は数ある講演会に少し毛の生えた程度のもの、だったのでは？そう考えると、タイトルを含め、過激さで売ろうとした本作は少し空回り気味・・・。



■□あれから50年！都市計画法も映画も！■□

都市計画、まちづくりを弁護士としてのライフワークにしている私は、日本建築学会・月刊ウェブマガジン『建築討論』特別企画2018年4月号で「制度疲労を起こしている都市計画法制の再構成と『官 with 民』によるまちづくりのあり方」と題する論文を発表した。これは「制度疲労」という、およそ法律家とは異質の発想から「都市計画法制の再構築」を目指す面白い企画だった。そこで私は、都市計画法制の制度疲労を指摘・分析し、

①1919年法から1968年法までの50年、②1968年法から2018年までの50年という「2つの50年」を解説した。

このような都市計画法の分野における「あれから50年」と同じように(?)、映画界でも「あれから50年!」の企画が目立ち、2019年12月には1969年に始まった『男はつらいよ』シリーズ第1作から50年を記念して、山田洋次監督の『男はつらいよ 50 お帰り 寅さん』(19年)が公開された。それに続いて、1969年5月13日に東大駒場キャンパスの900番教室で行われた「三島由紀夫 vs 東大共闘 討論会」が、50年ぶりにドキュメンタリー映画として甦ったが、それは一体なぜ?

■□■あの映像は帝国戦争博物館に! 本作の映像はTBSに! ■□■

「あれから50年」があれば、「あれから100年」もある。それが、第1次世界大戦中に西部戦線で撮影された映像に気の遠くなるような修復とカラーリングをし、さらに音声を加えて3D映像化することによって、100年前のものとは思えない映像をスクリーン上に再現したドキュメンタリー映画『彼らは生きていた』(18年)だった(『シネマ46』掲載予定)。その数千時間に及ぶモノクロ戦争映像はイギリスの帝国戦争博物館に所蔵されていたが、本作の素材となった映像は、TBSに保管されていた膨大な映像らしい。

本作のパンフレットにある豊島圭介監督インタビューによると、それは4時間以上の素材で、討論が約90分、残りは三島がTBSの番組に出た時などの映像らしい。また、三島由紀夫研究者・犬塚潔氏のコラム「1969年5月13日の三島由紀夫」によると、この映像は、①1969年5月13日のニュースで放送され、②1970年11月25日に三島事件を受けた総集編として放送され、③同年12月30日には、年末特集の70年発言集で放送され、さらに④三島没後18年目の1988年11月23日午後10時のJNNニュースで放送(放送時間は約11分)されたようだ。

『彼らは生きていた』は数千時間に及ぶ素材を見事なドキュメンタリー映画に仕上げているが、豊島圭介監督はそんなTBSの素材を活用して『三島由紀夫 vs 東大共闘 50年目の真実』と題した本作をいかなるドキュメンタリー映画に?それはパンフレットの「PRODUCTION NOTES」を読めば明らかだ。本作のすべての始まりは、「TBS社内に三島由紀夫の貴重な映像がある」という情報だったらしい。プロデューサーは「この約80分の討論の映像はTBSだけにしか存在しない」、つまり「世界に一つだけ」の貴重な映像を「これは絶対に後世に残さなければならぬ」との思いにかられて映画化を決定し、監督には1971年生まれで東大卒の豊島圭介に白羽の矢が立てられたわけだ。

■□■論争し論破! そのことの意味は? 全共闘の次の一手は? ■□■

1967年4月に大阪大学法学部に入学した私にとって、世界的に「ベトナム戦争反対」の世論が強まり、フランスでは「五月革命」が起こり「政治の季節」と言われた1968

年の4月から12月までは、大学2回生の時代。入学してすぐ1967年4月の学生自治会のクラス委員に「あるきっかけ」で立候補し当選した私は学生運動にのめり込んでいたが、そこでは「クラス討論」等の「公開の場」で対立している相手方陣営の論客と論争してこれを論破し、我が陣営の支持を広げるのがメインの活動だった。そのためには、その時代の「さまざまな論点」について文献や資料を読み込んで勉強し、自分の陣営内でのディスカッションで弁論術を高めるのが大切だった。また、論争は口頭だけではなく書面でもやるもの。そのため、毎日早朝、「学生諸君」に読んでもらうための宣伝ビラを原稿をガリ版で書いて印刷し、大量に配ることも大切だった。つまり、私の1967年4月から1969年3月までの大学1回生、2回生の丸2年間はその努力、一言で言えば「論争し、論破する」ことに費やされたわけだ。

他方、1969年1月18～19日の安田講堂事件によって壊滅的打撃を受けた東大共闘が、論争し論破することの「次の一手」として企画したのが、右翼思想の持ち主として有名だった作家・三島由紀夫との公開討論（論争）をやり、三島を論破すること。これによって「東大共闘なお健在なり」を世間に知らしめようとしたわけだ。それを企画したのは、具体的には「駒場共闘会議東大焚祭委員会」だが、そこでは、三島のことを「近代ゴリラ」と呼んでいたから、かなり失礼だ。東大共闘の全盛時代だった1968年11月の駒場祭のポスターは有名で、ポスターに書かれたそのテーマは「とめてくれるなおっかさん、背中の中のいちょうが泣いている、男東大どこへ行く」だった。それに対して本作のパンフレットには、討論会を知らせるビラが掲載されているが、それは私をはじめ見るもの。そもそも私は、駒場共闘会議東大焚祭委員会なるものが結成されていたこと、また、会場入口には「東大動物園特別陳列品『近代ゴリラ』」と描かれたポスターが貼られていたことも全く知らなかった。

三島は1968年10月に「楯の会」を結成していたが、1969年5月13日に開催された討論会の会場となった東大駒場キャンパス900番教室には、三島の警護のため、元楯の会1期生の原昭弘も出席していたらしい。そんな物々しい雰囲気の中で始まった「三島由紀夫 vs 東大共闘」はいかなる論争を展開し、いかに相手を論破したの？

■□■映像だけでは理解不可能？解説（の応援）が不可欠？■□■

前述した『彼らは生きていた』は、貴重な映像を編集しただけで全編を完成させ、そこには解説者の解説を一切入れなかった。それに対して本作は、①「元東大共闘」として、芥正彦、木村修、橋爪大三郎、②「元楯の会」として、篠原裕、宮澤章友、原昭弘、③「討論の場にいた人々」として、清水寛、小川邦雄、④「三島と親交があった人々」として、瀬戸内寂聴、椎根和、⑤「三島を論じる文化人」として、平野啓一郎、内田樹、小熊英二を登場させ、ドキュメンタリー映像の合間に彼らの「解説」を入れている。これは多分、当時の学生運動特有の難解な用語を含めて、討論を映像で流しただけでは、これを聞き、

見る観客には理解不能、と豊島監督が判断したためだ。さらにハッキリ言えば、本作を監督するについて、豊島監督自身がこれらの関係者たちのインタビューを行い、当時の背景や発言の狙いや意味をしっかりと聞き取らなければ、自分自身が討論の中で登場している言葉の理解ができなかったためだ。

しかし、ここで私が気に入らないのは、⑤を入れたこと。それ意外の①、②、③はそれぞれ自分の立場で討論会に参加していた人たちだから、自分の立場がそれぞれ明確で、逃げも隠れもできないもの。また、④の瀬戸内寂聴、椎根和も「三島と親交があった人々」という自分の立場を明確にしている。ところが、⑤の平野啓一郎、内田樹、小熊英二の3人は、私の大嫌いないわゆる「文化人」として意見を好きなように言うだけの立場だ。しかし、そんな文化人の影響力が大きくなるとは、ドキュメンタリー映画としての意味がなくなってしまうのでは！？

現にTBSに残されていた映像以外の本作の解説では、豊島監督による芥正彦のインタビューが最も興味深い、その他は概ね凡庸。また、この3人の文化人の解説についても、私は「ああ、また言いたいように自説を展開しているな」と思うだけだ。現在、世界的猛威を振るっている新型コロナウイルスについて、テレビ局は連日医学界の権威をはじめとする多くの「解説者」を登場させて、コロナウイルスの予防策、政府が取ってきた対策の是非、終焉の見込み等々について（くだらない）解説をさせているが、そんなアホバカ向けのバラエティー番組に私はうんざり。1971年生まれ豊島監督も東大を卒業しているのなら、これらの文化人に頼ることなく、あくまで自力でTBSにあった4時間の映像を分析し、編集すべきだったのでは？

■■■鑑賞前後の勉強は不可欠！キーワード集の工夫は？■■■

前述したように、私は『三島由紀夫vs東大全共闘』と題したドキュメンタリー映画たる本作に、平野啓一郎、内田樹、小熊英二という3人の文化人を登場させて自説を含めた解説をさせたことに大反対。その理由は、彼らの解説によって観客を不当にミスリードしてしまい、自分で考えることを邪魔する危険があるからだ。たしかに、生の映像に見る東大全共闘vs三島由紀夫の議論は言葉そのものが難しいし、しゃべるスピードも速くかつ断片的な物言いも多いから、その理解は難しい。司会者がそれを要領良くまとめてくれればいいが、それも難しいから、特に三島由紀夫vs芥正彦の論争になると理解不可能な議論も多い。そこで必要なのが、事前・事後にそれらの語彙を確認し、論点を整理することだ。したがって、私は本作については上記の文化人の解説ではなく、要所要所でしゃべっている言葉を文章として表示したり、その言葉の意味を解説する文章を入れてほしかった。もちろん、それを読むのは鬱陶しいし、会場の緊迫感を一瞬消いでしまうかもしれないが、議論の意味を理解することを優先すれば、それもありのはずだ。

他方、本作のパンフレットには、レビュー、コラムとして①中条省平氏（映画評論家）

の REVIEW 「三島と全共闘からの、いまでも有効な挑戦状」、②内田樹氏（神戸女学院大学名誉教授）の COLUMN 「政治の季節」、③平野啓一郎氏（小説家）の COLUMN 「三島文学の魅力と、そこから読み解く思想と行動」、④佐藤秀明氏（近畿大学教授・三島由紀夫文学館館長）の COLUMN 「隠れた文脈——三島由紀夫の狙い」があるが、本作のパンフレットにこのようなコラムやレビューを特集するのは大賛成。また、そこで私が不可欠だと思うのは、豊島監督自身による三島由紀夫 vs 東大全共闘討論におけるキーワードの解説集だ。それをやらないで、文化人の解説に寄りかかっているのが豊島監督の弱みであり、それが本作の弱点だと私は思うのだが・・・。

■□■左翼 vs 右翼、冒頭の三島の問題提起をどう見る？■□■

豊島監督は本作のタイトルを『三島由紀夫 vs 東大全共闘』としたうえ、「思想も立場も正反対の三島由紀夫」を強調している。たしかに、「左翼 vs 右翼」の対立構造に当てはめれば、東大全共闘と三島由紀夫はその両極端だし、天皇を巡る立場でも正反対。また、楯の会を結成し、たびたび自衛隊への体験入隊をしてきた三島由紀夫と、ゲバ棒、火炎瓶で国家権力（その暴力装置たる機動隊）と対決してきた全共闘にとって自衛隊はその背後にある最も強大な敵だから、その対立はあらわ。しかし、それは、それだ。

日本経済新聞は連載中だった小説『ミチクサ先生』の作者、伊集院静氏の病氣療養のため、それを2月20日をもって休載し、新たに赤神諒の小説『太陽の門』の連載を始めた。その2020年3月時点の舞台は、スペインの首都マドリードだ。元米国軍人の主人公リチャード・ブレインはそこで酒におぼれる日々を送っていたが、行きつけの酒場で偶然知り合った素人民兵のスペイン娘ブランカがナチスドイツと結託したフランコ率いるファシスト軍（スペイン政府軍）に無謀な戦いを挑んでいる姿を見ていると・・・。目下そんな展開だが、映画『カサブランカ』（42年）の主人公が、かつてのスペイン内戦（1936～39年）の義勇軍だったという設定から着想したというこの連載小説は面白そうだ。しかし、1969年の日本はあくまで法治国家で平和な国であり、内戦状態にあった当時のスペインとは大違いだ。したがって、いくら「左翼 vs 右翼」と思想・立場は違っても、お互いに命の危険はなく、三島は各地の大学での講演会をこなしていたらいい。

本作は、第一章「七人の敵あり 三島の決意表明」、第二章「対決」、第三章「三島と天皇」、最終章「熱情」に分けられているが、そもそも「七人の敵あり 三島の決意表明」と第一章をあえて挑発的な章のタイトルにしているのはナンセンス。また、第一章では、「驚くべきことに彼は、敵対しているはずの東大全共闘と自分との『接点』を語り出す。暴力と思想を結び付けている点と同じだと言うのだ。」と書いているが、そもそも豊島監督のこの問題意識はそれ自体が間違っているのでは？

たしかに、主催者を駒場共闘会議東大焚祭委員会とした東大全共闘の狙いが、そこに書かれているように「古臭い知性＝三島を燃やしてしまえという意図もあった。」ことは、司

会を務めた木村修や、芥正彦、橋爪大三郎らの聞き取りをすれば明白だ。しかし、三島が「覚悟を秘めた強い眼差しで、挨拶代わりのスピーチを始めた」と決めつけるのは如何なもの。三島が「ポスターに近代ゴリラと書かれていた」、と冗談を交えて始める挨拶代わりのスピーチは、極めて普通なものだ。また、自分の反知性主義の立場や、東大の権威への反発、さらには丸山眞実学派への反発を語る姿も、私にはごく自然な彼の自己紹介に思える。つまり、私に言わせれば、三島はここに闘いに来たのではなく、単に東大全共闘との論争を楽しみに来ただけなのだ。

■□■三島の「攻勢」をどう見る？芥との論争に注目！■□■

続けて、第一章で豊島監督は「木村から質問を受けた三島は、『共産主義を敵とすることに決めました』と今度は攻撃に転じ、緊張が走る。」と分析しているが、これも私に言わせればナンセンス。なぜなら、私の理解ではこの発言は、幅広い論客である三島が、東大闘争の中で日共・民青と鋭く対立している全共闘との討論会の最初の論点として、日本共産党と共産主義の問題点を提示したに過ぎないと考えるからだ。したがって、主催者側の木村は司会者としてそれを引き取ったうえで論点を明示し、それについての全共闘側の発言を求めるべきだったが、木村の能力不足のため残念ながらそれができていなかったことが明らかだ。つまり、木村は三島からの冒頭約10分のスピーチをうまくまとめることができないまま、思わず「三島由紀夫先生」と言ってしまったというミスで笑いを誘うレベルになってしまっているわけだ。

したがって、もしここに田原総一朗や、私がいつも観ている「BS フジLIVE プライムニュース」の反町理キャスターのような名司会者がいれば、第一章は「七人の敵あり 三島の決意表明」と題するような「対決」を強調するものにはならず、もっと内実を伴った議論になっていたはずだ。

■□■公開討論の意義は？その成果は不十分！？■□■

それは第二章「対決」も同じだ。本作は第二章に赤ん坊を抱いて登場する“東大全共闘随一の論客”と称えられた芥正彦と三島由紀夫との論争が最大のハイライトだが、そこでの議論は言葉が難解であるうえ、芥のしゃべり方がぞんざいかつ断片的だからわかりにくい。したがって、これをうまくかみ合わせるのが司会者たる木村の役割だが、残念ながらここでも木村にその交通整理をする能力がなかったのが残念。そこでは三島自身が芥との議論をかみ合わせようと努力している姿が顕著だが、司会の大役を任されている木村は何の役割も果たせていない。また、芥のつけんどんなモノの言い方は許せるとしても、自分から三島との議論を整理し、会場の人たちにそれをわからせようとする姿勢が全くないのが残念。「それが全共闘流」と言ってしまえばそれまでだが、あの全共闘特有のしゃべり方は何とかならないの・・・？そう思っていると、「解放区」の空間と時間を巡る難解なテ

一マについて、やっ少し論点が整理された(?)ところで、三島との議論の不毛さにイラ立った(?)芥が「じゃ、俺帰るわ」と言って帰ってしまったからアレレ……。東大全共闘 vs 三島由紀夫の討論会を有意義なものにするためには、このいきなりの芥の退出を主催者側が阻止し、さらに議論を整理する必要があったはずだ。

その後の討論を含めて東大全共闘 vs 三島の討論の全貌はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたい、私には本作のそんな弱点が目について仕方がない。そのため、結論として、この公開討論の意義は三島にはほとんどなく、一般的な大学での講演会にちょっと迫真的な生の議論が加わった程度のものであったのでは? 他方、東大全共闘にとっても、三島を招いたという宣伝効果は大きかったものの、それによって学生諸君の勉強が進んだわけではなく、単なる一過性のイベントに過ぎなかったのでは? そう考えると、この東大全共闘 vs 三島由紀夫の討論会の成果は不十分なものと言わざるを得ない。

さらに、そんな私なりの結論に基づいてその後の三島の行動を考えていくと、1970年11月25日に起きた三島の割腹自殺にもこの討論会の影響は全くなし。私はそう断言せざるを得ないが……。

2020(令和2)年4月3日記